

令和 5年 1月 22日 第2回目鑑賞会 鑑定刀要旨

(日野原大 講師) 『 』書きは当日講師の解説したワンポイントアドバイス

鑑定刀

1号 太刀「雲次」 【重要美術品】 穴3ツ

長さ 2尺 4寸 5分弱 反り 9分半

鎬造り 庵棟 先に行っても反りが加わり輪反り状が顕著

板目に杳目交り、肌立って流れる 地沸細かく付いて地斑映り 鉄色やや黒味かかる

刃文、広直刃調で 丁子刃、逆かかった互の目が交じり、足・葉が入る、

角がかかる刃を交えた中に《陰の尖り刃》と称される刃の内側に向かって尖った刃を見せる

上半より下半が大きく乱れている

帽子、焼き幅浅く、直に入って大丸に返る

《上州館林藩秋元家伝来》

『反りが深く踏ん張りが抜けてはいるが輪反りを示して中切先ということから鎌倉後期と考えられる』

『来国俊であれば輪反りではあるが映りは「沸映り」となり、京逆足や棟焼に注意、帽子は小丸に』

2号 刀 無銘【青江】 穴3ツ、内1ツ埋め

長さ 2尺 3寸 3分半 反り 6分

【佐藤寒山師旧蔵】

鎬造り 庵棟 中切先

板目に杳目を交えて総体に肌立ち 地沸付き 乱れ映り立つ

刃文、のたれ調に逆丁子交じり、足・葉入り、金筋・砂流しがかかり明るく冴える

帽子、のたれ込み 表・尖りごろに返る 裏・角ばる 表裏とも盛んに掃き掛ける

彫物 表裏・二筋樋 茎の中で搔流し

『青江は板目に杳目を交えて細かに肌立ち地景交え、地鉄も青黒く冴えて縮緬肌状を呈する』

『本作のような逆丁子の場合は直刃に多い「段映り」ではなく「乱れ映り」となるものが多い』

『青江の逆丁子の場合、尖った帽子を見せながら乱れ込み掃き掛けるものが多い』

『刃文が刃縁から刃中にかけて白く冴えるのは青江一派の特徴で、これは直刃の場合も同様』

『尋常やや広めの身幅に中切先が伸び先にも反りが加わって、鎌倉最末～南北朝初期と観られる』

3号 太刀 「備州長船盛光」 穴3ツ 金着二重鉤

「応永十二年八月日」

【鈴木嘉定コレクション】

長さ 2尺 3寸 7分 反り 8分半

鎬造り 庵棟 僅かに区送りあり

板目に杳目交じり 良く練れて地沸付き 細かな地景風の鉄交じって、乱れ映り立つ

刃文、丁子に互の目、腰開きの刃・角張る刃など交えて足・葉入り

帽子、乱れ込み 小丸に返る

《紀州徳川家伝来》

『一見鎌倉期の太刀姿を思わせるが、先反りがつき重ねも厚く、腰開きの刃が目立つことより応永備前と見られる』

4号 短刀 「近江大掾藤原忠広」

穴1ツ

長さ 8寸 8分 反 殆どなし

【鈴木嘉定コレクション】

平造り 庵棟 重ねやや厚め

小板目詰み少し肌目立ちごろに 地沸微塵に厚くつき 細かに地景入り 鉄色冴える  
刃文、中直刃調に浅くのたれを見せて小沸よく付き明るい 表に小さく喰違い刃を見せる  
帽子、フクラと並行に小丸に返る 少し掃き掛け気味に 浅く返る

『小板目が地沸付きポツポツと細かに立っていわゆる《小糠肌》といわれるものになる』

『肥前本家の上三代のうち三代忠吉は短刀が殆ど無く、初代か二代と考えると、初代も短刀は少ないながら三ツ棟が多く匂口がやや締り、こうした帯状の匂口(本作では部分的)を見せるのは初代でも晩年の武蔵大掾銘以降で二代の近江大掾忠広に多い』

『二代忠広のこうした直刃には喰違い刃や二重刃がしばしば見られる』

5号 刀 「(三日月紋)大慶荘司直胤(花押)」

穴1ツ 金着二重鉋

「文化八年仲秋」

長さ 2尺 2寸 1分 反り 4分半

鎬造り 庵棟 元先の身幅に開きがあり、先反りも加わって室町期の姿に似る

小板目よく詰み 無地風となり、地沸付き、(焼き頭と映りが繋がる態に)乱れ状に映り立つ

刃文、腰の開いた互の目乱れ、逆がかる角互の目、尖り風の乱れ、矢筈風の乱れなど交じる

小沸付き 鉋元の刃文うるみごろ

帽子、乱れ込み掃き掛け 地蔵風

『本作は応永備前の写しと見られ、その存在は知られてはいたが経眼は稀である(これ1振りのみ)』

『本作の映りも周囲の映り部分より硬く見える焼状の組織が交じって見られる所謂《焼映り》となる』

『鉋元の刃文がうるむのは水心子系の刀工に良く見られる手癖である』

『銘文上の(三日月紋)については諸説あり、目釘穴とあわせて日月を表現したものと云う』